様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０３２５１

研究課題名（和文）両親の抑うつおよび養育行動と10歳児の行動特徴との関係

研究課題名（英文）Relations between Parents' Depression, their Parenting, and the Behavior of 10-Year-Old Children

研究代表者
安藤　智子（Ando, Satoko）

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：９０４６１８２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：妊娠中から産後10年までの母親・父親に対する質問紙調査と4年時、11年時に、父子・母子・父母子の観察研究を実施した。抑うつ得点は、母親・父親共に妊娠期が高く、産後2年にかけて下がり、その後緩やかに上昇した。抑うつの区分点を超えた割合は、区分点を超えた割合は母親が6.7%～19.1%、父親が7.3%～17.3%であった。家庭で母親・父親の両方、あるいはいずれか一方が区分点を超えている割合は、14～29%であった。。
　また、夫婦の抑うつ得点の推移を類型する分析では、妊娠中から一貫して抑うつが低い家庭、母親のみやや高い家庭、父親のみ高い家庭等が見出され、早期の夫婦関係が影響していることも確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
産後10歳までの母親、父親の抑うつが、2, 3年時にかけて下がり、その後緩やかに上昇することを見出した。また、父親の抑うつが高く経過する家庭があることや母親、父親双方の抑うつがいずれも高い家庭があることなど、日本における子育て期の母親・父親のメンタルヘルスの状況を明らかにしたことは新規性があり、養育や家族支援に貢献できる。特に、母親の抑うつに焦点を当てた介入がなされてきたが、父親も含め、また、夫婦の関係性が鍵になることを見出したことも、今後より効果的な家族介入を考えるための示唆を得たといえる。

研究成果の概要（英文）：Questionnaires were conducted to mothers and fathers during pregnancy, 5 weeks, 3, 6 months, 1 year, and then 1 year each up to 10 years. And we administered observational studies at 4 years and 11 years.
Mothers exceeding the cutoff point was 6.7% to 19.1% and 7.3% ～17.3% for fathers. The percentage of the family with both mothers and fathers or one of them exceeding the category point ranged from 14 to 29%. Depression during the perinatal period has become widely known, we found the high depression scores of fathers.
Furthermore, we found depression score of with consistently low depression, slightly high depression only for mothers, high depression only for fathers, and slightly elevated depression only for fathers. We found the influence of early marital relationships on these differences. Good relationship with the partner supports the mental health of the couple and is the foundation for the development of the child.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：両親の抑うつ　縦断研究　夫婦関係　養育態度　子どもの行動　感情調整　アタッチメント

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

子どもの心身の健全な成長には、人生早期の親の関わりや家族の機能が重要であることは明らかになっている。特に産後の抑うつは、母親の養育態度や子どもの行動調整や認知機能などへの影響が報告されてきた。また、産後に父親も抑うつを経験することがあると報告されているが、日本での研究はまだ少ない状況だ。

国外の大規模調査でも、両親の抑うつが子どもの心身の健康に影響することが明らかにされている。北米での研究では、父親の抑うつが、幼児の行動への直接の影響が報告されている北米の研究がある一方、日本では、母親との関係性を介して幼児の行動に影響する研究結果をこれまでの縦断データの分析から見出した。

また、虐待件数の報告は上昇傾向が続き、子育て支援は社会的に大きな課題であった。それまでの研究成果をふまえて、周産期からの母親の抑うつのスクリーニングや新生児訪問などが行われるシステムが構築されてきたが、父親へはまだ目を向けられていなかった。

抑うつの症状である気分の落ちこみ等の心身の状態を抱えながら日常生活や仕事、子育てをすることは、苦痛を伴い負担であると推測に難くない。子どもに関心を向けて養育をする力が家庭の中の大人である母親、父親にどの程度あるのか、子どもへの影響について日本のデータが十分ない状況であった。

２．研究の目的

母親だけでなく父親の抑うつも測定し、その関連要因や養育態度、子どもの行動への影響関係を探索的に検討することを目的とした。

３．研究の方法

妊娠中、産後５週、３か月、６か月、１年、その後１年ずつ産後 10 年まで、母親・父親への質問紙調査を実施した。また、質問紙に加えて、親子の実際の相互作用を検討するために、4 歳時、11 歳時に、父子・母子・父母子の観察実験研究を実施した。

抑うつは、エジンバラ産後うつ病質問票（Cox, Holden, & Savivsjt, 1987；岡野他, 1996)、子どもの行動は、Strength and Difficulty Questionnaire（Goodman, 1997；菅原他, 2006)、夫婦関係は Marital Love Scale(菅原・詫摩, 1997)の一部を用いた。妊娠期には、母親 762 名、父親 557 名の協力を得た。

次に主要な分析結果を記す。

（１）母親と父親の抑うつの妊娠期から産後 10 年までの推移の検討

①抑うつ得点は、母親・父親共に妊娠期が高く、産後２・３年にかけて下がり、その後緩やかに上昇した（図１)。抑うつのスクリーニングに用いられる区分点（本研究では、父親８点、母親９点とした）を超えた割合は、妊娠中に母親 19.1%, 父親 13.1%であり、その後母親父親共に割合が減少し、１から３年以降上昇した。(表１)

②夫婦のいずれかが区分点を超えていた家族は、妊娠期 27%、その後も 19%, 16%と１割以上で、４年以降 10 年までは２割前後で推移した。家庭単位でとらえると、母親・父親のいずれかが区分点を超える割合は、母親・父親それぞれでとらえるよりも高い割合であった。

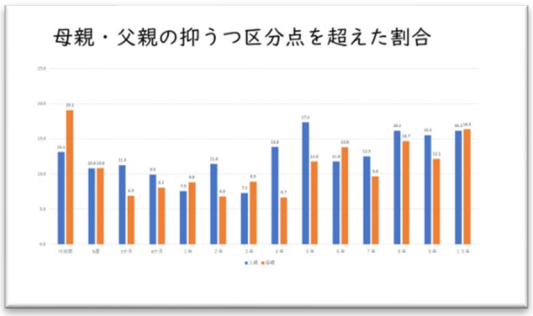

図１　母親・父親の区分点を超えた割合

周産期の抑うつは広く知られるようになったが、母親と同様父親の抑うつ得点も高いこと、また、子育て期の母親、父親の抑うつの高い家庭は一定数あり、乳幼児期以降も見守りや支援が必要な家族があると推測された。

表１　母親と父親の抑うつ得点

	妊娠期		5週		3か月		6か月		１年		２年		３年		４年		５年		６年		７年		８年		９年		１０年	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
父親	4.5	2.8	4.0	3.0	3.7	3.1	3.5	2.8	3.1	2.7	3.5	3.6	3.3	3.2	3.9	3.6	4.4	4.6	4.1	4.1	3.9	3.4	4.2	4.3	4.4	4.4	4.4	3.6
母親	5.9	3.7	4.3	3.6	3.7	3.1	3.7	3.6	3.6	3.4	3.6	3.1	4.0	3.5	3.8	3.0	4.2	3.1	4.7	3.7	4.0	3.2	4.9	3.8	4.6	3.7	4.4	4.2

③母親と父親の抑うつ得点の推移の類型の検討

母親と父親の抑うつ得点の推移を合わせて類型を試みた分析では、妊娠中から一貫して抑うつが低い家庭、母親のみやや高い家庭、父親のみ高い家庭、父親のみやや上昇する家庭などが認められた。また、この類型には、最後 1 年早期の夫婦関係が影響している可能性が示唆された。

親密な他者であるパートナーとの関係性が良好であることが、夫婦のメンタルヘルスを支え、子どもの発達の基盤になると推察された。

（２）子どもの問題行動についての分析

①3 歳から 10 歳の子どもの外在化問題、内在化問題、向社会的行動の相互の影響関係の検討

３歳から 10 歳時の 8 年間の母親データ（n=210)を分析し、母親評定した子どもの外在化問題行動、内在化問題行動、向社会的行動を、交差遅延効果モデルで検討した。その結果、母親の抑うつを統制しても、すべての時点の外在化問題行動が向社会的行動に不の効果を及ぼしていた。また、7 歳の外在化問題は、8 歳の内在化問題行動に正の効果、9 歳の向社会行動は 10 歳の外在化問題に負の効果を及ぼした。幼児期から児童期までの外在化問題の連鎖が認められた。

②4・5 歳児の両親の関わりおよび家族のコミュニケーションの特徴との関連検討

縦断研究登録者の内、22 組の家族の協力を得た。女児 9 名、男児 13 名であった。観察実験の手続きは、父子の関わりを観察する場面、母子の関わりを観察する場面、家族で話し合いをする場面の３つの場面で構成された。録画した相互作用は、大人の行動、子どもの行動、家族のコミュニケーションの特徴の観点に分けて評定された。コレスポンデンス分析の結果、父子、母子場面共に否定･侵入的態度と応答･励まし態度の類型が見出された。また、家族 3 人の話し合い場面では、親密・柔軟、批判・敵意が見出された。さらに 4 歳以降の子どもの問題行動との関連を検討すると、否定・侵入群において、子どもの外在化問題得点が高い傾向が 10 歳まで認められた。

これらの結果から、子どもの幼児期後期の養育行動と子どもの外在化問題行動の関連が児童期までカスケードのように連鎖することが複数の分析から示唆された。支援の観点として、幼児期以前からの養育及び夫婦・家族のコミュニケーションの質の重要性が見出された。

４．研究成果

子育て期の両親の抑うつの変化を追って、タイプを見出すことができた。また、そのタイプを分ける変数を探索的に検討した結果、多くの時期の様々な変数の中から、周産期の DV、産後早期の夫婦の愛情関係が影響することが明らかになった。また、夫婦が良好な関係性であることや、親どうしや家族のコミュニケーションが協調的でなく、批判や敵意は、子どもの外在化問題行動に影響し、それが児童期までの外在化問題行動に連鎖することを見出したことも社会的にも意義があると考える。

母親の抑うつを減じる支援は現在母子保健等ですでに組織的に実践されている。それに加えて､父親の抑うつにも着目することや､夫婦関係を良好に保つことは新しい視点といえる｡また、子どもが生まれた後の、母親･父親間のコミュニケーションの質が協調的であることも重要であり、パートナー間のコミュニケーションに焦点をあてた取り組みや研究が必要だと考えられた。現在育児休暇取得も推奨されており、両親の抑うつや産後早期から、夫婦がお互いを愛し尊重し合うこと、関係性を良好に保つことへの支援を構築することも社会的課題であると考えられた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 直原康光; 安藤 智子; 登藤直弥; 荒牧美佐子; 塩崎尚美; 久保尊洋	４．巻 34
２．論文標題 幼児期後期から児童期後期の外在化・内在化問題・向社会的行動の経時的な相互作用：8年間の縦断データを用いた交差遅延効果モデルによる発達カスケードの検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 発達心理学研究	６．最初と最後の頁 208-218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11201/jjdp.34.208	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 安藤智子・荒牧美佐子・久保尊洋・ 塩崎尚美・直原康光・登藤直弥
２．発表標題 妊娠中から10年間の父母データの探索的な検討： 父母の抑うつ・夫婦の関係性・養育行動・子どもの行動の軌跡
３．学会等名 日本発達心理学会第34回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Satoko ANDO,Naomi Shiozaki, Misako Aramaki , & Naoya Todo
２．発表標題 The relations of parents’ depression, parents’ attitudes to children’s negative emotions and children’s behavior problem from 5 years old through 7 years old in Japan
３．学会等名 International Congress of Psychology（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 金井聖子・ 田崎さより・ 田中美千代・中尾達馬・安藤智子
２．発表標題 幼児・児童・生徒の行動と教師の対応をアタッチメント理論に基づいて考える
３．学会等名 日本発達心理学会第32回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 安藤智子・荒牧美佐子・久保尊洋・ 塩崎尚美・直原康光・登藤直弥
２．発表標題 母親・父親の抑うつと子どもの発達について考える：妊娠期から10歳までの縦断データ分析から
３．学会等名 日本発達心理学会第35回大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 安藤 智子・ 直原康光・ 登藤直弥・ 塩崎尚美・ 久保尊洋・ 荒牧美佐子
２．発表標題 母親・父親の抑うつと関連要因 ：妊娠期から産後10年までの検討
３．学会等名 第19回日本周産期メンタルヘルス学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Ando Satoko; Jikihara Yasumitu; Todo Naoya; Shiozaki, Misako Aramaki
２．発表標題 The relations of maternal attachment style, socialization of emotions and chidren's behavior
３．学会等名 The 18th World Congress for world association for infant mental health（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	塩崎　尚美 (Shiozaki Naomi) (30350573)	日本女子大学・人間社会学部・教授 (32670)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	荒牧　美佐子 (Aramaki Misako) (80509703)	目白大学・人間学部・准教授 (32414)	
研究分担者	登藤　直弥 (Todo Naoya) (70773711)	東京都立大学・人文科学研究科・准教授 (22604)	
研究分担者	直原　康光 (Jikihara Yasumitsu) (80909705)	富山大学・学術研究部人文科学系・講師 (13201)	
研究分担者	久保　尊洋 (Kubo Takahiro) (80887745)	筑波大学・人間系・特任助教 (12102)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関